

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

双極スペクトラムの背景

内海 健 (帝京大学医学部精神神経科学教室)

本発表では、気分障害の概念変遷をたどりつつ、双極スペクトラムが登場した背景について、疾病分類学的な立場から検討を加える。Kraepelinが二大精神病を確立した際、躁うつ病はきわめて包括的な概念であり、そこには抑うつ状態、躁状態、混合状態に加えて、基礎素質という正常への移行形態が含まれていた。つまりはスペクトラム概念が先取りされていたわけである。この一元論的概念は、1950年代から見直しを受け、単極性/双極性の二元論へと舵が切られることになる。他方、1970年代に北米で、うつ病相と、入院までには至らない躁状態、すなわち軽躁病相をあわせもつ病型(双極II型障害)が提唱され、1980年代にはAkiskalによって双極スペクトラム概念が提唱された。

このように振り返ると、双極スペクトラムとは、

一元論から二元論への変遷にともない、categoricalな分類から取り残された病態であるとまずは把握されるだろう。これに加えて、この移行期に気分障害概念が平板化したことも重要な要因として挙げられる。この時期、おもにSchneiderによって、Kraepelinの概念に次のような大きな修正が加えられた。第一に、躁うつ病を気分のみによって規定したこと、つまりは意志や思考といった他の領野を捨象したこと。第二に、混合状態を否定したこと。第三に、疾病とパーソナリティの間に明確な分断線が引かれたこと、である。これらのことは、双極スペクトラムが、単に躁とうつの間にはりわたされたグラデーションといった素朴な見方ではとらえきれぬ病態であることを示すものである。

(この論文は抄録集より転載しました)